古今著聞集における希望表現について

柴田昭二
連仲友

目次

一、はじめに
二、希望表現の構成形式
三、各形式の用法
四、おわりに

一、はじめに

本稿は、別稿[1]を受け、古今著聞集を研究資料として、それにおける希望表現[2]の実態を解明しようとするものである。

古今著聞集（以下、本書とする）は『日本古典文学大事典』[3]などによると、橘成季の編、建長六年（一二五四）十月に成立、二十巻三〇篇、全六九七話からなり、『今昔物語集』に次ぐ大部な説話集といえる。採録説話の選択は虚説を採らず、実録的な態度が窺える。採録の範囲は海彼に渡らず、本朝古今の説話に限定する。その内容から、編者の平安貴族時代への懐古の念が感じられる。その編成の方法は、すべて年代順で全説話を神祇・釈教・公事・武勇・和歌・管絃歌舞・能書・好色・飲食など三十篇に分類し、編成の方法はきわめて組織的である。その文体は、日本語の散文に漢文・和歌が挿入され、三種の文体が見られる。この編成と文体の特徴が本書における希望表現にも影響を及ぶ。

テキストには、永積安明、島田勇雄校注『古今著聞集』（岩波書店日本古典文学大系84　昭和四九年第八刷発行）を用いる。その底本は宮内庁書陵部蔵（一）本であり、翻刻に際してはテキストに従った。底本にある振り仮名を片仮名で、校注者のつけたものを平仮名で示し、仮名に漢字をあてた場合は、底本の仮名を〔　〕に入れて傍記し、官職・通称などに「の」「に」など（中の院・次になど）を附記した。

二、希望表現の構成形式

古今著聞集（以下、「本書」と略す）における希望表現と認められる構成形式及びそれぞれの用例数は以下の通りである。

「欲ス」　（八例）
「～ントオモフ」　（六三例）
「願」　（五四例）
「願ス」　（三例）

「願フ」（八例）
「ネガハクハ～」（七例）
「望ム」（二七例）
「祈ル」（三四例）
「乞フ」（一一例）
「請フ」（七例）
「請ズ」（一例）
「求ム」（二四例）
「誂フ」（三例）
「ホシ」（一一例）
「マホシ」（四例）
「タシ」（九例）
「バヤ」（一三例）
「モガナ」（四例）
「ナン」（四例）

本書における希望表現の構成形式の種類は多様にわたる。しかし、他の説話集に多数用いられる「欲望」の意を表す名詞用法の「欲」は見られない。名詞用法の「願」は多量に見られるが、主に巻第一、巻第二に現れ、仏教用語として用いられている。その他、慣用形式「～ントオモフ」「ネガハクハ～」、動詞「ネガフ」「ノゾム」「イノル」「コフ」「ショウズ」「モトム」「アツラフ」、形容詞「ホシ」、助動詞「マホシ」「タシ」、終助詞「バヤ」「ガナ」「ナン」が見られる。

三、各形式の用法

1、「欲」「～ムトオモフ」「～ムトス」の用法

まず、「欲」の用法をみよう。

本書には、「欲」は八例見られ、すべて漢文における用例である。その用法はいずれも助動詞用法であり、名詞用法は見られない。

(1)「柳中之景色暮、花前之飲欲レ罷レ」といふ句ありけり。（巻第四　一二八頁）

(2)人皆有レ癖。不レ能欲レ罷。（巻第十五　三八四頁）

例(1)(2)において「欲」にふりがな「ス」が記され、その訓読法は「～ムトス」か「～ムトホッス」か検討する余地があるが、いずれにしても、漢文の語法では助動詞用法である。その意味は、「花の前の宴が終わろうとしている。」「やめようとしてもできない。」の意と解され、「将然」の意を表す。しかし、例(1)は単純な「将然」の意を表すが、例(2)は、「～やめたくても」という「願望」の意ととることもでき、その場合は希望表現の下位分類の「願望」[4]を「説明」[5]する用法と見ることもできる。

次に、「～ントス」の用法を見る。「～ントス」は基本的に上述した漢文における「欲」の用法と同様であり、すなわち、ある状況が発生しようとする「将然」を表す。自然現象、すなわち「無情物」の場合は希望表現と関係しないが、「有情物」の「将然」には希望表現と関連する用法がある。

(3)さて歸らんとする時、適一曲を授けり。（巻第六　二一四頁）

(4)此男、案のごとく池をわたりて、中島にきてくゐをうたむとす。（巻第十六　四〇九頁）

例（3）（4）は、「帰ろうとする時、」「杭を打とうとした。」の意と解され、いずれも有情物の「将然」を表す用法であり、先の例（2）と同様に、希望表現と類似するものといえる。

次に、「～ントオモフ」の用法を見る。本書に希望表現と認められる「～ントオモフ」は六三例見られる。

（5）「萬歳樂をとゞめて賀殿を奏せんと思。」　（巻第六　二一一頁）

（6）「此廿貫の錢をもて齋料にして、念佛申て、後生たすからんとおもふなり。」　（巻第十二　三三五頁）

例（5）（6）は、会話文における一人称現在形言い切りの形で、萬歳楽でなく「賀殿の楽を演奏したいと思う。」「後生に往生したいと思う。」の意と解され、これは「願望」を「表出」[6]する用法である。

（7）「我昨日物語せんと思しに、我を見ざりし、本意を背けり」。　（巻第二　八一頁）

例（7）は、会話文における一人称過去形の形で、「昨日話しかけようと思ったが」の意と解され、これは「願望」を「説明」する用法である。

（8）「汝九品の教主をみたてまつらんと思はゞ、百駄の蓮莖を設べし。佛種縁より生ずる故也」といふ。　（巻第二　七三頁）

（9）「かれへゆかんとおもふか」と問ければ、病者うなづきけり。　（巻第六　二一六頁）

例（8）（9）は、会話文における二人称現在形の形である。例（8）は仮定文、「九品の教主を拝見したいのならば、」の意、例（9）は疑問文、「西藤馬助の元に行きたいか。」の意と解され、いずれも「願望」を「説明」する用法である。

（10）西行法師、大峰をとをらんと思ふ志深かりけれども、入道の身にてはつねならぬ事なれば、思煩て過侍けるに、　（巻第二　九三頁）

（11）凡夫やつ四果のうりをぞえさせたる聖のつらにならんと思ふか　（巻第十八　四七七頁）

例（10）は、地の文における三人称現在形の形で、「大峰を通りたいと思う志が」の意、例（11）は、和歌における用例であり、「聖の仲間になりたいのか」。の意と解され、いずれも「願望」を「説明」する用法である。

2、「願」「願ス」「ネガフ」「ネガハクハ～」の用法

まず、名詞「願」の用法を見る。本書に名詞用法の「願」は五四例見られ、すべて佛教用語である。

（12）心の中に願を立られける程に、十二月廿七日、つゐに左大將になられにけり。　（巻第一　六二頁）

（13）俊乗房、東大寺建立の願を發して、その祈請のために大神宮にまうでゝ、内宮に七箇日參籠、　（巻第一　六五頁）

例（12）（13）における「願を立てているうちに」「東大寺建立の願を発して、」はいずれも神仏に対してかける「願」の意を表す、名詞用法である。

（14）遷化のとき、手に願文をにぎり、口に佛號を唱ておはりにけり。
（巻第二　八四頁）

（15）何となき願書の由にて、社司をかたらひて御寶殿にこめてけり。
（巻第一　六五頁）

（16）若宮のご託宣も思あはせられ、嚴島の宿願も憑ありてぞ思給ける。
（巻第一　六二頁）

（17）本願をもての故に、來て汝が意を安慰するなり。
（巻第二　七四頁）

（18）結願の日に成て、卷數をたてまつるとき、殿上に靈驗なき由を稱して、執奏せざりけり。
（巻第二　八〇頁）

（19）「汝人なりせば、これ程の大願に助成などはしてまし。」
（巻第二十　五二五頁）

（20）これも阿彌陀佛の悲願を報じたてまつるゆへにや。
（巻第二十　五三三頁）

例（14）～（20）における「願文」「願書」「宿願」「本願」「結願」「大願」「悲願」は熟語形式の用例である。いずれも佛教用語で名詞用法である。

次に、「願ス」の用法を見る。本書に「願ス」は三例見られ、すべて実動詞用法である。

（21）大臣おなじく願して戰をすゝむ。
（巻第二　七二頁）

（22）堂舍を建立して、藥師如來を安置せんと願し、其跡を崇と思ふ。
（巻第二　七六頁）

例（21）（22）における「願ス」はサ変動詞として単独で用いられる用法である。

（23）おのづから發願して大功を成したる、しかしながら御恩也。
（巻第一　一〇三頁）

例（23）における「発願す」は複合動詞で用いられる用法である。

次に、「ネガフ」の用法を見る。本書に「願フ」は八例見られ、すべて実動詞用法である。

（24）大原の良忍上人、生年廿三より偏に世間の名利を捨て、深く極樂をねがふ人也。
（巻第二　八九頁）

（25）西行法師、當時より、釋迦如來入滅の日、終をとらん事をねがひて、読み侍ける、
（巻第十三　三六九頁）

例（24）（25）は、「深く極楽に生まれることを願う人である。」「釈迦入滅の日に死ぬことを願って、」の意と解され、いずれも実動詞用法である。

次に、「ネガハクハ～」の用法を見る。本書に「ネガハクハ～」は七例見られ、その文末を「ン」及び動詞・形容詞の命令形で受ける。

(26)御母の夢に金色の僧來て、「われ世をすくふ願あり。ねがはくは暫御腹にやどらん。我は救世菩なり。家は西方にあり」といひて、

（巻第二　七〇頁）

(27)願以勤王多日志轉爲見佛一乘緣」（巻第十五　三九九頁）

例(26)は会話文における用例であり、例(27)は漢文における用例である。ともに「ネガハクハ～ン」の形で、「しばらくお腹に宿りたい。」「勤王を多日過ごした今は見仏の縁に変えたい。」の意と解され、いずれも「願望」を「表出」用法するである

(28)「願奏達公家、建立一伽藍、轉法輪云々」。

（巻第一　五二頁）

(29)「上人の寫經の間、罪報の衆生みな人中天上にむまれ、或は淨刹に詣る間、罪惡の地ことゞ荒廢せり。願は上人經を書給事なかれ」と、

（巻第三　一〇六頁）

例(28)は漢文における用例であり、例(29)は会話文における用例である。ともに「ネガハクハ～命令形」の形で、「一の伽藍を建立して法輪を転じてほしい。」「お経を書写しないでほしい。」の意と解され、いずれも「希求」[7]を「表出」する用法である。

また、「タマヘ」は「ネガハクハ」と呼応して用いられる場合は「希求」表現、単独で用いられる場合は命令表現と見るのが一般的である。しかし、対話の対象が神仏の場合においては、「ネガハクハ」と呼応せずに「タマヘ」のみで用いられても、命令表現でなく希望表現と見るのが妥当であろう。本書にこのような用法は三例見られる。

(30)八幡へむすめともに、なく〳〵まいりて、夜もすがら御前にて、「我身は今はいかにても候なん。此むすめを心やすきさまにてみせさせ給へ」と、

（巻第五　一五九頁）

(31)北野に參籠して、「此恥すゝぎ給へ」とて、

（巻第五　一七〇頁）

(32)住吉に詣て申けるは、「母われにかはれて命終べきならば、速にもとのごとくわが命をめして、母をたすけさせ給へ」と泣々祈ければ、

（巻第八　二四四頁）

これらの用例はいずれも神仏に対する祈りで、「どうか母が安心できるようにしてください。」「この恥をおすすぎください。」「母をお助けください。」の意と解され、いずれも「希求」を「表出」する用法である。

3、「望ム」「祈ル」「乞フ」「請フ」「請ズ」「求ム」「誂フ」の用法

まず、「望ム」の用法を見る。本書に「望ム」は二七例あり、そのうち名詞用法、実動詞用法及び熟語形式用法が見られる。

(33)知足院殿、何事にてか、さしたる御のぞみふかゝりける事侍けり。

（巻第六　二一四頁）

(34)「この御望は、いくたび也ともやすき事也。」（巻第六　二一七頁）

例（33）（34）における「望み」はいずれも「希望」の意を表す名詞用法である。

（35）彼大臣に鍾愛の女あり。其性いさぎよくて、偏に人間の榮耀をかろしめて、只山林幽閑を忍び、終に當寺の蘭若をしめて彌陀の淨刹をのぞむ。（巻第二　七三頁）

（36）三井寺の公胤僧正、結縁のために四十九日の導師を望て、兩界曼荼羅幷に阿彌陀像を供養してけり。（巻第二　九八頁）

例（35）（36）における「のぞむ」「のぞみて」は、「弥陀の浄土に生きれることを望む。」「導者となることを望んで、」の意を表す、実動詞用法である。

また、「望」が特定の語と結合して用いられる熟語形式も多数見られる。特に、「所望」の用法は際だつ。

（37）其後朗詠・催馬樂など、さまざまのこゝろわざども、所望にしたがひてつくしければ、あさましくうれしげに思たり。（巻第六　二一七頁）

（38）「小人達の所望かく候。いかゞ候べき」といひやりたりければ、（巻第十六　四二八頁）

例（37）（38）における「所望」は熟語形式の名詞用法である。

（39）修理大夫顯季卿、近習にて所望しけれども、御ゆるしなかりけるを、あながちに申て、つゐにうつしとりつ。（巻第五　一八二頁）

（40）同二品不食の所勞の比、はすのみばかりを食するよしきゝて、坊城殿の池の蓮の實を所望して、をくり侍し返事に、（巻第十八　四八七頁）

例（39）（40）における「所望する」は、「所望」のサ変動詞化の動詞用法である。

（41）「我願既滿、衆望亦足」と誦せられけるを、（巻第八　二五八頁）

（42）本願禪尼、宿望すでに遂ぬる事をよろこぶといへども、戀慕のやすみがたきに堪ず。（巻第二　七四頁）

（43）さきに助教仲隆・助教師高・師季など競望しけるうへ、師方は大監物にて、いまだ儒官をへざりければ、直に拜任いかゞと沙汰ありけり。（巻第一　六七頁）

例（41）（42）における「衆望」「宿望」は熟語形式の名詞用法であり、例（43）における「競望する」は熟語形式の動詞用法である。

次に、「祈ル」の用法を見る。本書に「祈ル」の用例は三四例があり、そのうち名詞用法、実動詞用法、熟語形式用法が見られる。

（44）さまゞの御祈どもおこなはれけれども、御減なくて、（巻第一　五五頁）

（45）左の方より夜のあひだに勝岳負べき由の祈をせさせられにけり。（巻第十　二九七頁）

例(44)(45)における「祈」はいずれも「祈祷」の意の名詞用法である。

(46)守屋其木の上にのぼりて、物部の氏の神に祈て箭をはなたしむるに、太子の御鎧にあたりけり。　(巻第二　七二頁)

(47)觀海祈レ龍云、奉レ寫ニ八部法華經一、將レ救ニ汝苦一。　(巻第二　八〇頁)

例(46)(47)における「祈りて」は、いずれも「祈る」という行為を表す、実動詞用法である。

(48)八幡にまうでゝ、七日こもりて祈念しけるに、　(巻第一　六三頁)

(49)又行者祈願力によりて、百濟國より四天王の像とびきたり給て、金堂におはします。　(巻第二　七三頁)

(50)觀海祈感如レ願寫レ經、　(巻第二　八〇頁)

(51)「かやうに各同心に觀音經を卅三卷よみ奉るべし。我も祈請し試るべし」とて、　(巻第二　一〇五頁)

(52)そのとし旱魃の愁ありければ、とかく祈雨をはげめどもかなはず。　(巻第六　二〇四頁)

例(48)～(52)における「祈念」「祈願」「祈感」「祈請」「祈雨」はいずれも熟語用法である。

次に、「乞フ」の用法を見る。本書に「乞フ」は一一例あり、すべて実動詞用法である。

(53)伏乞、尊像示ニ以許否一。　(巻第七　二三三頁)

例(53)は漢文における用例で「伏して願う、」の意と解され、この語法は「願はくは～命令形」と同様、「希求」を直接「表出」すると見られる。

(54)陰陽師、「こはいかに」とて、馬をこひければ、　(巻第十　二八九頁)

(55)まづ酒をこひいだしていひけるは、大合子にて五度めすべし、　(巻第十六　四一五頁)

(56)夜もあけがたになりにければ、女おきわかれんとて、男の扇をこひていふやう、　(巻第二十　五一四頁)

例(54)(55)(56)における「こふ」の対象物はいずれも馬、酒、扇といった具体的物であり、それを求める意を表す用法である。

次に、「請フ」の用法を見る。本書に「請フ」は七例見られ、すべて実動詞用法である。

(57)而時代漸移、人心諂曲、請ニ國判一稱ニ私領地一。　(巻第二　七八頁)

(58)其形見えず成にけり。これを思つゞくるに、鞠を請にはヤクワといひ、アリと云、ヲウと云、鞠の性が額の銘名也。　(巻第十一　三二五頁)

例（57）は漢文における用例であり、（58）は和文における用例である。「国司の認判を受けて、」「鞠をもらう。」という意であり、いずれも実動詞用法である。

本書にはこの「請フ」と関連性がある「請ズ」も一四例見られるが、そのうちの一三例はある人物を「招く」「招聘する」の意であり、希望表現と関係がないため考察から除外するが、次の例は希望表現と認められる。

（59）「奉レ請シ念佛百反、我是佛法擁護ノ者、鞍馬寺ノ毘沙門天王也。爲ニ守護センガ念佛結緣ノ衆ヲ、所ニ來入スル也」。（巻第二　九〇頁）

例（59）は漢文における用例であり、「お願い申し上げます。」という希望表現の意と解され、これは「願望」を「表出」する慣用的な用法と見ることができる。

次に、「求ム」の用法を見る。本書に「求ム」は二四例あり、すべて実動詞用法である。

（60）「病は是善知識也。我依リテニ苦痛ニ深クニ求ムニ菩提ヲ」とぞの給ひける。（巻第二　八六頁）

（61）暗求メニ浮雲之富ヲ、常成ニス深夜之悕ヲ之。（巻第十二　三四〇頁）

例（60）（61）は漢文における例であり、「菩提を求める。」「浮雲の富を求め、」の意と解され、抽象的なものを求める実動詞用法である。

（62）なましき魚を求て是をすゝめ給ふに、（巻第二　七五頁）

（63）男案じめぐらして、龜を一もとめて、くびを引出て、三四寸がほどを切てけり。（巻第十六　四三〇頁）

例（62）（63）は地の文における用例であり、「魚を手に入れて、」「亀を手に入れて、」の意と解され、具体的な物を求める実動詞用法である。

次に、「誂フ」の用法を見る。本書に「誂フ」は三例あり、すべて実動詞用法である。

（64）或誂ヘニ畫工ニ、略呈ニス振古之勝槩ヲ」（序　四七頁）

（65）いま五ケ日がうちに、また額あつらへたてまつるべき人あり、必書給べし、（巻第七　二三六頁）

例（64）（65）における「誂ふ」は「画工にたのんで、」「額を作って」の意と解され、いずれも実動詞用法である。

4、「ホシ」「マホシ」「タシ」「バヤ」「ナン」の用法

まず、「ホシ」の用法を見る。本書に形容詞「ホシ」が一一例見られる。「ホシ」の派生語「ホシガル」は見られない。

（66）「もし射（い）はづしぬる物ならば、汝がほしく思はむ物を、所望にしたがひてあたふべし」とさだめて、（巻第九　二八〇頁）

（67）「食物ならぬものをたべては候へども、これを腹にくひいれて候へば、ものゝほしさがやみて候也。」（巻第十二　三五一頁）

例(66)(67)は、「あなたが欲しいと思うものを与えよう。」「ものがほしいことがおさまって」の意と解され、内心の「願望」を「説明」する用法である。

次に、「マホシ」の用法を見る。本書に「マホシ」は四例見られる。

(68)孝定が所爲、かくこそあらまほしき事なれ。いといみじき事なりかし。（巻第八　二五四頁）

(69)佐實も當時こもりゐねば、眞實のやうきこしめさまほしく思召て、（巻第十六　四四八頁）

例(68)(69)は地の文における用例であり、「このようにありたいものだ。」「実際のところをお聞きになりたいとお思いになって、」の意と解され、いずれも「願望」を「説明」する用法である。

(70)「世にあらば、かやうなる物をこそおもひいでにもせまほしけれ」などいふ。（巻第十六　四四六頁）

(71)平茸はよき武者にこそにたりけれおそろしながらさすが見まほし（巻第十八　四八一頁）

例(70)は会話文における用例であり、「一生の思い出にしたい。」の意、例(71)は和歌における用例であり、「さすがに見てみたい。」の意と解され、いずれも「願望」を「表出」する用法である。

次に、「タシ」の用法を見る。本書に「タシ」が九例あり、そのうち「タガル」が二例見られる。

(72)「御邊ちかく候物にて候。見參に入たく候て」といふ。（巻第六　二一七頁）

(73)「琵琶には手と申て、めでたき事の候ぞかし。それがうけ給たく候て」といふ。（巻第六　二一八頁）

例(72)(73)は「お目にかかりたくございまして。」「それをお教えいただきたい。」の意と解され、一人称の「願望」を「表出」する用法である。

(74)「きゝたがる人を悦につかうまつれば、仰にしたがふべし」とて、（巻第六　二一七頁）

(75)孝博、老後に重病をうけては、念佛などをこそ申べきに、宿執にひかれて、樂をきゝたがりけるこそあはれに侍れ。（巻第十五　三九〇頁）

例(74)(75)は「私の声技を聞きたがる人のあることを悦びとして、」「楽を聞きたがっていたことが」の意と解され、外に現れている三人称の「願望」を「説明」する用法である。

次に、「バヤ」の用法を見る。本書に終助詞「バヤ」が一三例見られ、和歌と会話文に用いられる。

(76)「春の日のつれ〴〵にくらすよりは、つねならぬいどみ事を、御前に御覽ぜさせばや。」（巻第十一　三一三頁）

(77)「おもしろき雪かな。いづかたへかむかふべき。小野皇太后宮のもとへむかはゞや」と仰せられけるを、（巻第十四　三七八頁）

例(76)(77)は会話文における用例であり、「御前に御覧させたい。」「小野皇太后のもとへ行きたい。」の意と解され、「願望」を「表出」する用法である。

(78)雨ふれば軒の玉水つぶ〳〵といはゞや物を心ゆくまで
（巻第六　二一九頁）

(79)あやめをばほかにかりても葺つべしちまきひくなるうちにいらばや
（巻第十六　四七七頁）

例(78)(79)は和歌における用例であり、「そのように心の中にたまったことを気の済むまでいいたい。」「ちまきを配ってもらう仲間に入りたい。」の意と解され、「願望」を「表出」する用法である。

次に、「ガナ」の用法を見る。本書に終助詞「ガナ」が四例あり、そのうち「ガナ」一例、「モガナ」二例、「テシガナ」一例が見られる。

(80)いかでがな物いひかはさむと思けれども、人めしげくて、かなはざりければ、
（巻第十六　四三三頁）

(81)それを此盛廣心にかけてひまもがなと思けれども、便あやしくてむなしく過けり。
（巻第十五　四二七頁）

(82)法の月久しくもがなと思へども夜や深ぬらん光かくしつ
（巻第二　七六頁）

(83)こと、いはゞあるじながらもえてしがなねはしらねどもひき心みん
（巻第五　一七〇頁）

例(80)(81)は地の文における心情を描写する用例である。「なんとかして言葉をかわしたいと思う」「ふたりきりになる機会を得たいと思って」の意と解され、「願望」を「説明」する用法である。例(82)(83)は和歌における用例である。「長く仏法を守り続けたいと思ったが、」「琴の主のあなたも一緒にほしい。」の意と解され、「願望」を「表出」する用法である。

次に、「ナン」の用法を見る。本書に終助詞「ナン」が四例見られ、すべて和歌に用いられる。

(84)萬代もいかでかはてのなかるべき佛に君ははやくならなむ
（巻第五　一四一頁）

(85)水のあやをふきくる風の夕月夜浪のたつなる衣かさなむ
（巻第五　一六五頁）

例(84)(85)は、「あなたには仏となってほしい。」「衣を貸してほしい。」の意と解され、いずれも相手に対する「希求」を「表出」する用法である。

四、おわりに

以上、古今著聞集における希望表現の構成と用法を考察してきた。本書は他の仏教説話と異なり、実録的態度で聖俗を問わず、本朝古今の説話に限定し、それらを百科全書的に仕上げたもので、その内容は俗にまで及ぶ。編集は年代順に整然と分類している。その文体は和文・漢文・和歌で構成される。このような特徴が希望表現にも反映される。

その希望表現の構成形式は多様であり、漢字表記の「欲」「願」、慣用形式「～ムトオモフ」「ネガハクハ」、動詞「ネガフ」「ノゾム「イノル」「コ

フ」「ショウズ」「モトム」「アツラフ」、形容詞「ホシ」、助動詞「マホシ」「タシ」、終助詞「バヤ」「ガナ」「ナン」が見られる。また例（59）に見られる「奉請」は文書の書き始めに「願望」を表す表現として注目される。これらの構成形式は文体と密接な関係があり、殊に「欲」は漢文に、終助詞は会話と和歌に多用される。また、希望表現の全体的分布は散発的ではなく、主に巻第一の「神祇」と巻第二の「釈教」とに集中している。これは神仏にかける「願」及び神仏に対する「祈る」という内容と関連して、また当然の結果である。

各構成形式の用方についていえば、名詞用法には「願」「ノゾミ」「イノリ」が見られるが、「欲」は用いられない。本書における「欲」はすべて漢文の助動詞用法である。動詞用法には「ネガフ」「ノゾム」イノル」「コフ」「ショウズ」「アツラフ」が見られる。これらの名詞用法は希望の概念を表し、動詞用法は希望に基づく動作行為を表すものであり、希望表現の周辺的存在である。

慣用形式の「～ムトオモフ」「ネガハクハ～」は内心の希望を表すもので、希望表現の重要な内容である。本書にもこれらの用例が多数見られ、「願望」「希求」を「表出」「説明」する。和語の形容詞、助動詞、終助詞も内心の希望を表し、「ホシ」「マホシ」「タシ」「バヤ」「モガナ」は「願望」、「ナン」は「希求」を「表出」「説明」する。この慣用形式と和語の形容詞、助動詞、終助詞こそ希望表現の中核であることは今までの考察と一致した結果である。

【注】

（1）柴田昭二、連　仲友「希望表現の通史的研究　序説」『香川大学教育学部研究報告第Ⅰ部第109号』平成12年3月

（2）ここでいう希望表現とは、人の願い望みに関する、一種の心情的表現形式である。また、その下位分類として、話者自身の動作・状態に対して向けられるものを「願望表現」、他者の動作・状態に対して向けられるものを「希求表現」と称する。さらに、希望を直接発する場合を希望の「表出」、それ以外の問い質しや過去などの場合を希望の「説明」と称する。現代日本語においては、「願望」は「～たい」の形で、「希求」は「～てほしい」の形で表現するのが最も一般的である。したがって、一人称現在形形式「一人称～たい」「一人称～てほしい」はそれぞれ「願望」、「希求」の「表出」であり、一人称の過去形「一人称～たかった」「一人称～てほしかった」、二人称形式「二人称～たいか」「二人称～てほしいか」、三人称の「三人称～たがる」「三人称～てほしがる」などの形式は、「説明」にあたる。

（3）『日本古典文学大事典』第二巻　一九八四年一月第一刷発行　岩波書店

（4）注（2）参照。

（5）注（2）参照。

（6）注（2）参照。

（7）注（2）参照。

（しばたしょうじ　香川大学名誉教授）
（れんちゅうゆう　広島市立大学客員研究員）

（二〇一七年一一月三〇日受理）